

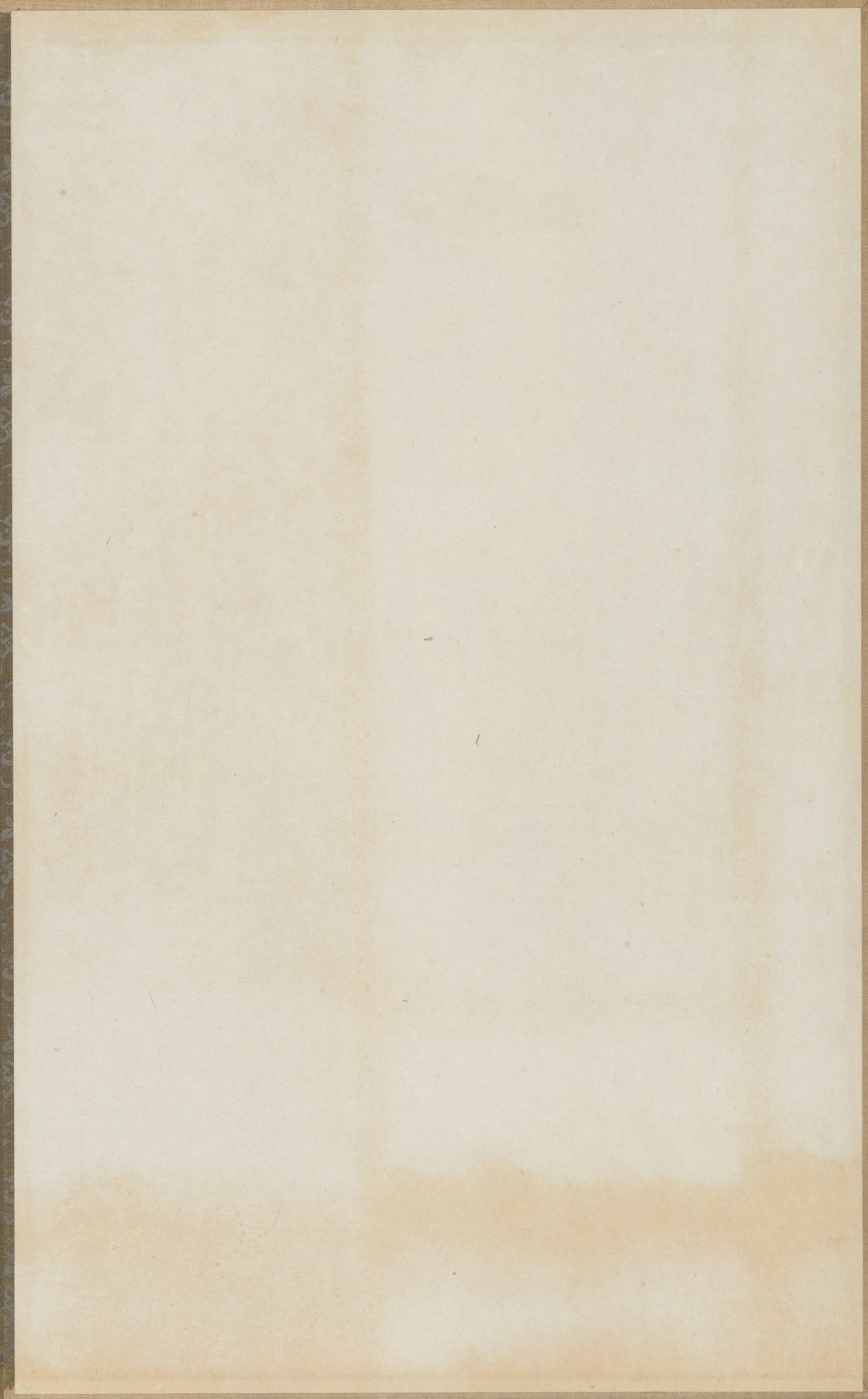
文人畫三大家集

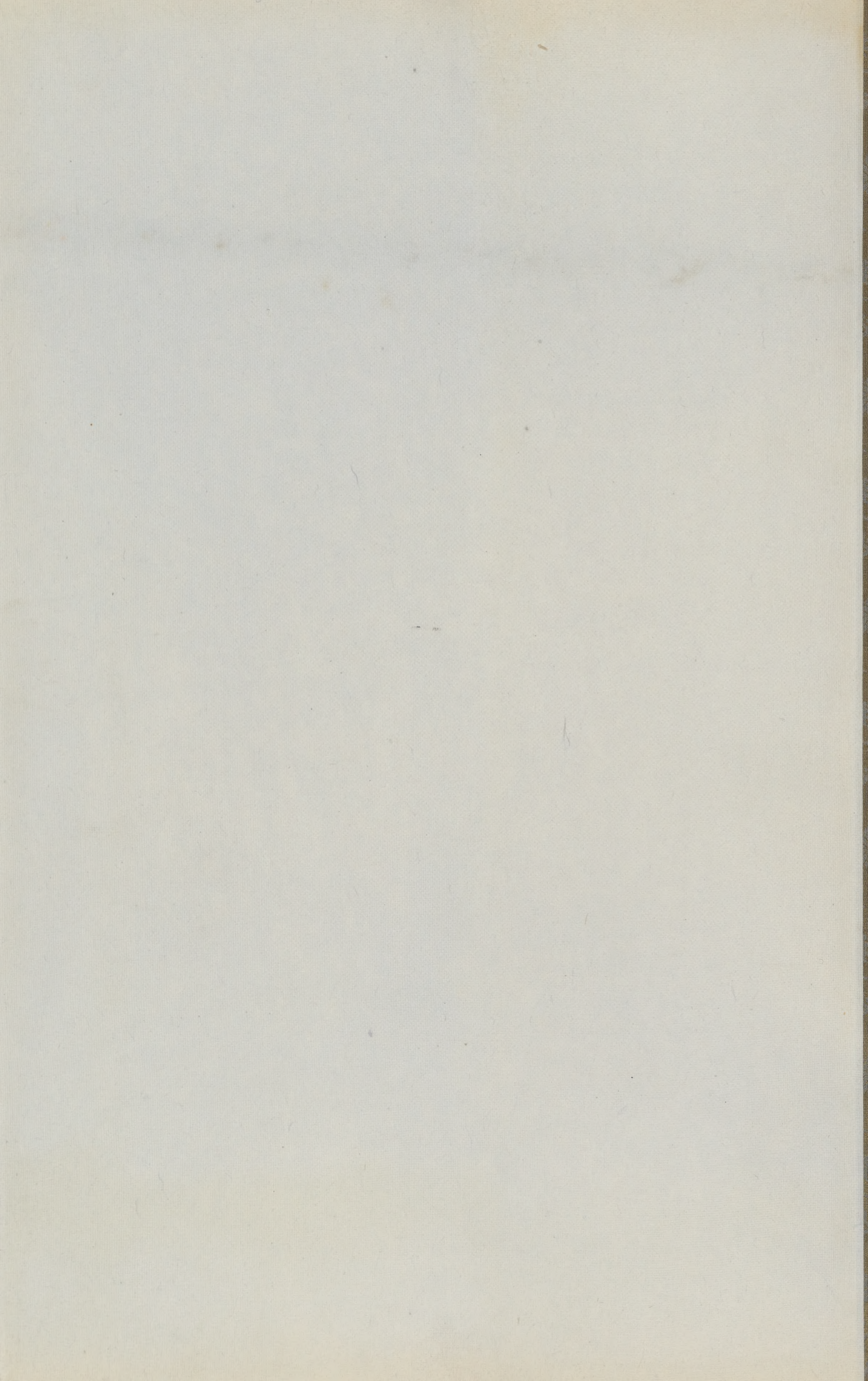
595
Bunjinga
Sandaikashu

Blank Page Digitally Inserted

文人畫三大家集







文人畫三大家集

緒言

幕府の末造に當り、漢學の隆興と共に、明清風の畫格頗る流行し、濟々たる文人雅士、互に椽大の筆を弄し、競ふて温藉の畫を作りて、畫界に別天地を拓きたるは實に一代の壯觀なりき、而して其翹楚たりしもの、前に大雅、蕪村あり、後に竹田、峯山あり、但だ大雅は其人格高逸にして其畫亦詩氣横溢せりと雖も、構圖多くは蕪雜、落筆また穩實ならず、獨り蕪村は竹田の言へる如く、用筆傳彩全然たる明人、布置點景これを邊邑僻境の寔景に取る、故に景は新にして法は古く、意を用ふること最も深し、高名の下虚士なく、其作る所の畫は、一種の俳味津々として、縑楮の間に溢れんとするの概あり、吾人は寛政前後の大家中彼れを推して第一人と爲さんこそす、又蕪村より少しく年代降れる文化文政は幕末に於ける文藝最盛の時代なり、名家星の如く、巨匠林の如くなりき、而も文墨一代を壓し、丹青當時に冠たりしものは蓋し田能村竹田なり、筆に隨つて詩文立るに成り、意の向ふ所山水花卉倏ち生ず、而も絶代の文豪賴山陽にあらざれば敢て一語を其畫に著くることを許さず、自ら信ずるの厚く、標置するの高くして、他人をして其畫を汚さしむることを欲せざりしを見て、韻致の超妙卓拔なるを想ひ知るべし、峯山に至りては其操行實に百世の龜鑑とする所、其畫に於けるも亦命世の大手筆たり、況んや其揮灑せるもの、精忠純義の氣磅礴せるをや、吾人は平生深く此三大家の人格に推服し、其畫風を尙慕するものなるが故に、各自の傑作を網羅し、之を天下に紹介して以て其面目を發揮せんと欲し、其材料を諸家の珍藏より撰抜して、茲に本書を發行す、人或は蕪村、峯山の作を以て文人畫と稱するの妥當ならざるを難ざといへども、二家固より文人逸士の班に在りて、其作品また脱俗超凡、些の匠氣なく、一點の市臭なく、畫風一に明清の餘韻ありて、詩氣掬すべきもの多し、之を稱して文人畫といふ、何の不可あらんや

本書は三大家の代表作を網羅して略々遺憾なきを得たるを信ず、然れども本書掲載以外尙若干の傑作なきにあらざらず、此等は悉く東洋美術大觀に收載し、兩々相待つて益々三名家の面目を發揮すべし、終りに臨みて珍藏家諸君が本書の爲めに其珍藏撮影上尠からざる便宜を與へられたるを謹んで感謝す

明治四十一年四月二十八日

審美書院主幹 田 島 志 一 識

書の欲との其意蘊鬱遠土嬉々たる可宜や興へる可なりざる可なりと懸念を
 を此巻に悉く東洋美術大観の神髄に兩々昧然へて益々三巻案の面目を發見せしむる可なりと懸念を
 本書に三大案の升表を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 風一に明前四十二平四頁二十八日と懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 さざる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 を採録し其林林が精案の意蘊を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 人部は兼照し其畫風を尙慕するものなるを採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 畫に採るも亦命世の大平筆たり其筆墨の神髄を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 うる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 以て第一巻を其畫の巻とす其畫の神髄を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 蓋し田繪林が田が筆の神髄を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 の採るも亦命世の大平筆たり其筆墨の神髄を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 辨はし吾人の意蘊を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 の採るも亦命世の大平筆たり其筆墨の神髄を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 畫林の神髄の言へる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 昔田繪山とす其畫の神髄を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 の採るも亦命世の大平筆たり其筆墨の神髄を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を
 幕報の末段に當りて其畫の神髄を採録し了綱を盡しむる可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を然る可なりと懸念を

辭 言

文人畫三大家略傳

與謝 蕪村

蕪村、本姓は谷口、字は春星、又宰鳥と稱す、初の名は長庚、後に寅と改む、また落日庵、三果堂、紫孤庵、碧雲洞、白雲堂、四明、夜半亭等の數號あり、攝津國東成郡毛鳥村の人にして、其生地、天王寺村に屬し、村の蕪菁に名あるの故を以て乃ち自ら號して蕪村と云へり、幼にして母氏の生家に養はる、其生家は丹後國與謝郡に在り、因て姓を與謝と更む、一説には嘗て丹後に遊びて與謝に住し、其山水を愛する餘り、自ら名づけしなりとも云ふ、江戸及び奥羽諸州を歴遊し、後京都に住す、其歿年に就きては數説あれども、天明三年十二月二十九日、六十八歳にて歿したりとの説最も信すべきが如し、蕪村儒學に達し、殊に俳諧を善くし、且つ繪畫に妙を得たり、畫は初め清人にして長崎に渡來せし伊孚九の法を學びしが、後更に元明の諸家を涉獵し、大癡(元朝)石田(明朝)の妙を兼ね、吳小僊、張路共に明朝の神髓を窺ひたりと稱せらる、田能村竹田嘗て蕪村の畫を評して曰く、用筆傳彩、全然たる明人、布置點景、これを邊邑僻境有るところの寔景に取る、故に景は新たに法は古く、意を用ふること最も深し、高名の下虛士なし、洵に誣ひざるなりと、吾人其遺作を見るに、多くは邊邑の實景を捉へ來れるものにして、布置安排の高妙なる、筆致傳彩の秀拔なる、觀る者をして心神恍惚、身も亦畫中に在るの思あらしむ、筆者の手腕卓絶ならずんば、焉くんぞ能く此に至るを得んや

田能村 竹田

田能村竹田、名は孝憲、字は君彝、行藏と稱す、竹田は其號、また雪月書堂、補雪廬等の別號あり、豊後國竹田の人、家世、岡藩の醫員にして、父を碩庵と云ふ、竹田幼にして學を好み、詩を嗜み、藻思人に過ぐ、稍長じて醫を學ぶ、然れども其志に非ざるを以て、藩主特に命じて儒員とす、時に歳二十三、是に於て東都に遊學し、古屋昔陽、岳東海に従ひて經義を修め、傍ら畫法を谷文晁に學ぶ、是より先き唐橋世濟、豐後地理志を撰し、稿を脱せずして歿す、藩主、竹田等をして其業を卒へしむ、竹田因て東都に居ること一年餘にして、國に歸り、其書を修め、功を以て賞せらる、後幾くならずして熊本に遊び、又京都に出で、村瀬栲亭に就て修學し、居ること二年にして再び郷に歸る、三十八歳の時、病を得て致仕し、是れよりまた經史を講せず、優悠性を養ひ、風流自ら娛む、數京阪に往來し、特に頼山陽、篠崎小竹、小石樞園、雲華上人等と深く交はれり、賦性多才にして、詩文書畫を能くし、且つ聞香點茶の道に通せしが、就中畫は其最も得意とせし所にして、高く自ら標榜して世人の趨舎に従はず、専ら法を支那元明清の諸家に取りて遂に一家を成すに至れり、頼山陽、雲華上人皆畫を嗜み、性高簡にして物に傲るを以て現はる、然かも竹田の畫に接するや、賞嘆措かざりしと云ふ、以て其造詣の如何に深かりしかを知るべし、天保六年八月二十五日、大阪に病死す、年五十有九、著はす所、填詞圖譜、竹田莊詩話、游府内百活矣、黃蘗記行、陶寫小語、隨緣沙彌語錄、曹游日記、今才調集、屠赤瑣々錄、泡茶新書、師友畫錄、山中人饒舌、自畫題語等あり

渡邊華山

渡邊華山、名は定靜、字は子安、又伯登、通稱を登と云ふ、華山は其號なり、また寓繪堂、全樂堂、昨非居士、金叢居、隨安居士等の別號あり、三河國田原侯の藩臣にして、寛政五年江戸の藩邸に生る、少にして大志あり、藩儒鷹見爽鳩に就て學を修め、後また佐藤一齋の門に入る、頗る書史に涉獵し、兼て洋學に通じ、且つ書を善くす、一日友人某來り、談じて曰く、子儒たらんと欲す、誠に善し、然れども子や貧なり、儒を學ばんよりは寧ろ書を學びて早く黄金を得るの勝れたるに如かずと、華山性至孝父母に事ふる甚だ努む、友人の言を聞き、感じて曰く、儒を學びて以て天下に爲すあらんとす、父母の飢寒を如何せん、姑く憾を飲みて書に従事せんと、乃ち谷文晁、金子金陵の諸家に就きて書法を學ぶ、而も家貧にして良紙を購ふ能はず、日に十六文乃至二十四文を投じて纔に美濃紙を買ひ、書を寫す、後諸家を折衷し、古法に則りて遂に一家を成すに至れり、當時外舶頻りに沿海に來り、上下攘夷の異論ます、熾んたりしにより、華山深く之を憂ひ、鳩舌小記、慎機論等を著はして之を排せしかば遂に幕府の忌諱に觸れて獄に投せられ、後宥されて國に幽せらる、華山幽中に在りて怨色なく、屢書を裁して友人と贈答す、幕府幽囚者の妄りに書翰を往復するを藩侯に讓め、其怠弛を譴す、華山曰く、藩侯吾を以て罪を幕府に得、吾何ぞ生を偷むを得んと、乃ち自殺す、年四十九、時に天保十二年十月十一日なり、華山生前其所藏の書畫數百を舉げて、藩侯に獻す、或人華山に謂て曰く、君積年心を用ゐて蒐聚する所のもの今悉く之を侯に獻す、以て惜むべしと爲さるるか、華山笑て曰く、大に惜む所なるが故に侯に獻するのみ、子孫もし其貴ぶべきを知らずして之を重んぜず、或は散逸し、或は蠹魚に付せば余が丹精何の益あらん、もし子孫にして其貴ぶべきを知る者あらば、亦余の如く之を集むべきのみと、或人其公益を思ふの切なるに感じ、黙して去りしと云ふ

魯 雁 溪 湖 寒 所 猛 福 林

生 門 山 石 林 歡

炊 風 竹 睡 富 校 虎 祿

夢 雨 雨 猫 岳 書

圖 圖 圖 圖 圖 圖 圖 圖 圖

同 同 同 同 同 同 同 同 同

筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆

一 一 一 一 一 一 一 一 一

枚 枚 枚 枚 枚 枚 枚 枚 枚

和

靖

賞

梅

群馬圖屏風一雙

與謝燕村(寶曆十三年)筆

絹本着色

各縦五尺、横一丈一尺二寸

京都帝室博物館藏

本書は燕村四十八歳即ち漸く圓熟の境に入りたる頃の筆なり、蓋し當時未だ晩年に於けるが如く、世人の彼れに就いて畫を需むる者多からず爲めに、純に畫かんと欲して而も之を購ふの資なきを憾みとせしに、たま／＼純を得たるを以て得意満面筆を驅つて描き成したるもの即ち此一雙の屏風なりといふ、毫鋒續密にして傳彩淡雅、群馬の動靜一々其態を異にし、而もおのづから生意あり、眞に珍重すべき傑作なり



卷之六 月夜 廿三 歲次 十
吳昌碩 畫





柳塘晚霽圖屏風一雙

與謝蕪村(明和元年)筆

純本着色

各縦五尺五寸、横一丈二尺一寸五分

京都 林 新助君藏

本書は群馬圖を作りし翌年の筆にして亦純本なり、清風徐ろに來つて柳枝を拂ふの狀景寫し得て妙趣あり、人物の風貌また頗る閑雅を極む

妹の髪をのれ最富し骨丁娘髪の人脚の風塵をす散る閑罪を辨せ
本畫の無誤圖を辨せし鑿卒の筆に丁衣繪本をの術風俗を來て了明

京師 林 謙 刊

香翠正只正七編一丈二尺一七正卷

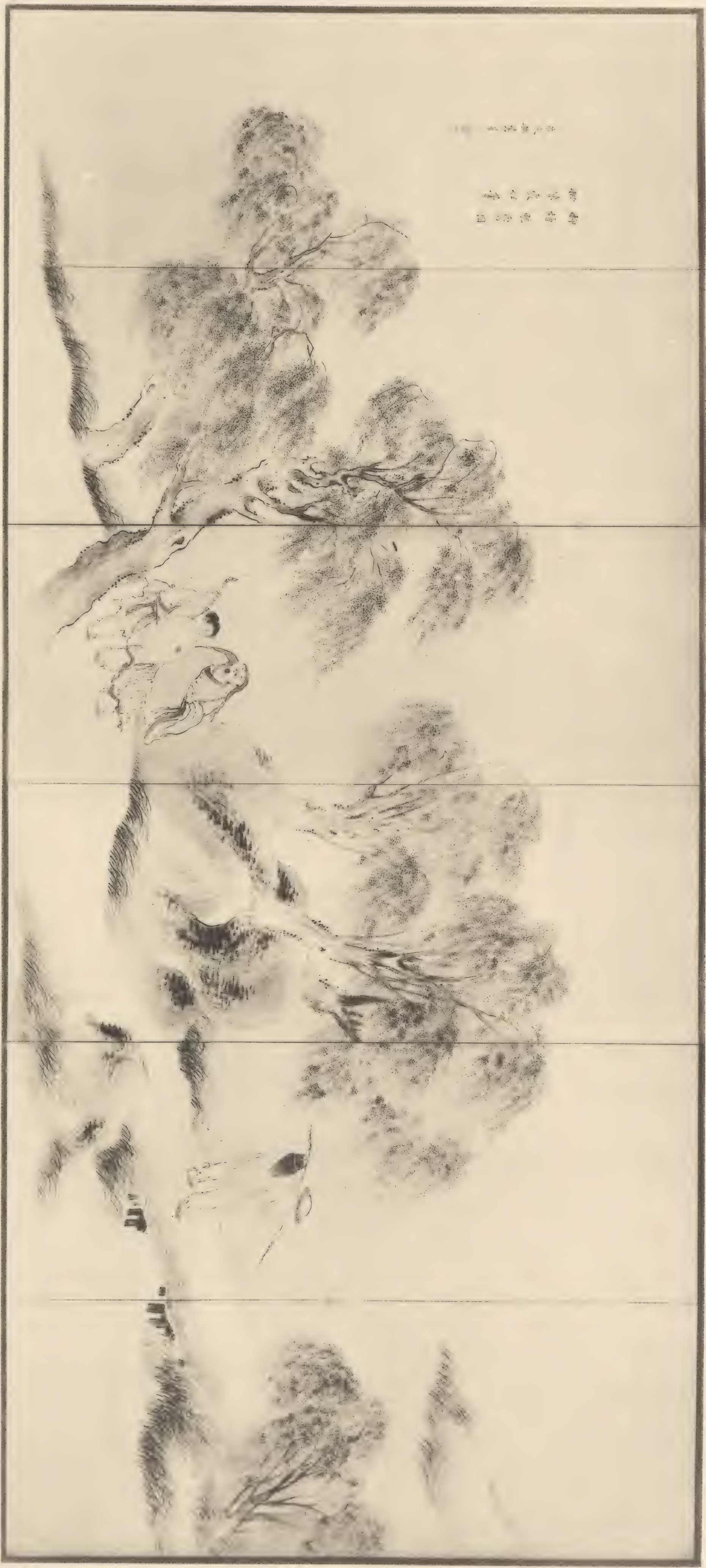
繪本善也

時世如畫圖風一雙

真備燕林(四十六卷)刊

清溪山房
無名氏
畫





山水图卷之一

柳塘晓色图
卷之二

雙鹿圖屏風

與謝蕪村(明和四年、五十二歲頃)筆

紙本著色

縱四尺五寸三分、横七尺四寸八分

讃岐國高松 十河權三郎君藏

明和丁亥四年の頃、蕪村四國に遊歴したることあり、故に高松には蕪村の作頗る多し、十河氏の如きも、此畫の外、山水の襖を藏せり、本畫の筆致、蕪村の作としては、較々粗なれども、五十歳前後の作風を見るに、最も佳なるものなり。



のふり

のそらへりお輝々麻のひぢり正十歳前翁のそらへり見さし景をそらへり
そらへり正十歳前翁のそらへり見さし景をそらへり本翁のそらへり
細曲てそらへり正十歳前翁のそらへり見さし景をそらへり

龍精園高信 十四歳三歳有衆

龍精園高信 十四歳三歳有衆

瑞本堂

雙魚圖景風

與備蒸林(十二歳有衆)作



鹿 三 頭

春山探勝圖 與謝蕪村筆

絹本着色

縦三尺三寸五分、横一尺二寸四分

男爵岩崎小彌太君藏

本圖亦有數なる一佳作、山頂櫻花散らんとし、草徑暖を帯びたる所、馬上の高士一僮を伴ひて行く、駘蕩たる陽光畫面に満ちて、觀る者をしてそゞろに遊意を起さしむ、一幅清快の氣、鑒賞盡きざるを覺ゆ、蕪村の畫常に斯くの如き餘韻あり、果して之を何れより得來れるか、蓋し其天成の趣味の致す所なりとす

を視るは

の映る鏡箱の果しては、その面を以て掛來するは蓋し其天如の懸想の遊
に、蓋する事として、一冊の書、其の意を以て、蓋す。蓋すは蓋す。蓋すは蓋す。
高士一冊を以て、行へば、蓋す。蓋すは蓋す。蓋すは蓋す。蓋すは蓋す。
本圖亦其意を以て、一冊の書、其の意を以て、蓋す。蓋すは蓋す。蓋すは蓋す。

根柢 小書 太極

辨三三三正衣、辨一八二七四衣

備本音

春山雜俎圖 輿圖燕林筆



朝暮里會茶夜三首中

枯木蒼鷹圖 與謝蕪村筆

紙本淡彩

縱四尺二分、横一尺五寸七分

播磨國明石 細谷立齋君藏

蕪村の畫は眞行草の諸體一として可ならざるなし、而して茲に出す圖は其行體の最も妙なるものなり、枯木蒼鷹の筆致活氣格表に横溢し、觀者をして其縦横自在の手腕に嘆服せしむ

この其圖自注の平綴の御類等には
並行帶の最も特なるものなるが故に其書の筆致が
燕林の書に異なり草の蓄積一として可なるもの
を以て其の出を圖に

漢書卷四十四 律書律書

漢書卷四十四 律書律書

漢書卷四十四 律書律書

燕林蒼蠶圖 與橋燕林筆



白東齋春日寫意

秋景山水圖

與謝蕪村（安永六年）筆

純本着色

縦三尺九寸八分、横一尺七寸三分

近江國大津 村田利兵衛君藏

本圖は専ら披麻皴を用ひて重疊せる峯巒の秋景を描けるものにして、布局超凡、何人も企及すべからざる妙あり、而して前景に二三の老樹を配置し、重を荷ふて歸路を急ぐの一老爺を點出したる老獮の手法頗る贊稱すべきなり

シテ云々

丁重を著ふ丁編を意うの一法筆を撰出し其る法筆の手出頭を賛蘇す
試験凡何入も全紙をシテ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
本國の事云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

三十四頁 林田村長 著

三三頁 七八頁 附一頁 十三頁

編者 著

林田山水圖

興橋 著 林田村長 著

昔承丁酉春二月廿八日

平陽 謝奉 畫



息世路可日若一國
誰行誰理否備逐乃者
何此林窮於事華秋
西情

平陽 謝奉 畫





寒林野興圖 與謝燕村筆

絹本着色

縦三尺六寸八分、横一尺二寸

攝津國灘 嘉納治兵衛君藏

本書も亦恐らくは六十歳以後の作ならん、其全局の結構卓絶にして、峯巒
巖石の描法また秀絶なるのみならず、遠林の風景咄々真に迫り、前路の騎
士寔に脱俗の妙あり、寒天野外の興趣津々として縑上に横溢するを覺う

士家ニ雄辯の雄あり寒天裡の興義者ありし了歸土の難益をるを憂こ
蠟下の難者より我難なるのふびとを蕪林の風景即ち興の意も前篇の禪
本論と表裏より一則六十歳以後の并立より其意の深淵を難しし了歸

爾明園 嘉州南吳南園

錄三頁六七八頁附一頁二七
備本善也

寒林裡興園 興義蘇林



春景山水圖 與謝蕪村筆

絹本着色

縦三尺二寸、横一尺五分

男爵岩崎小彌太君藏

墨暈寫し來つて温藉、山麓の樹林漸く遠きに随つて烟靄の間に隱見し、溪流潺々として其間を流れて江に入る、筆致蒼老、畫格高邁、吾人をして復た贊するに辭なからしむ



柳溪歸牧圖

與謝蕪村(安永九年)筆

絹本着色

縦四尺一分、横一尺二寸五分

男爵岩崎小彌太君藏

蕪村の畫は、竹田の謂へる如く、一々邊邑僻境の寔景を捉へ來れるものにして、布置安排の高妙なる、筆致傳彩の秀潤なる、觀る者をして心神恍惚、身も亦箇中に在るの思あらしむ、蕪村の蕪村たる所以實に茲に在るなり



六十五
湖山圖
元

農家飼馬圖

與謝蕪村(安永九年六十五歲)筆

絹本着色

縦四尺一分、横一尺五寸八分

京都 林 新助君藏

綠翠漸く滴らんとする處、一老爺の悠々として春を踏むあり、農夫野外より歸り來りて厩舎の赭馬之を迎へ、一頭の鼯鼠また屋宇の上を走るあり、一幅の畫圖よく山邨農家の情景を寫出して妙趣湧くが如し、實に是れ蕪村會心の作なりといふべし

予五首湖濱寫



谿澗高隱圖

與謝燕村(天明年六十六歲)筆

絹本着色

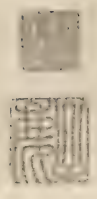
縦三尺六寸三分、横一尺四寸六分

大阪 生島嘉藏君藏

本畫は燕村經意の作にあらざるに似て、而も晩年の一傑作なり、筆致磊落にして、布局秀妙、題語に所謂臨溪卜築高蹤可徴の意寫し得て十分なるに
あらずや



樹竹蒙容暉
齋暖增臨溪
下葉高蹤可
微寒梅蕊林
繁在屋後誰
度北橋山路
登、若非春
伴定是詩朋
辛丑之秋
竹山居士題



東成謝魚



溪村晚靄、秋林伐木圖雙幅

與謝蕪村天明元年筆

絹本淡彩

各縱三尺五寸 横一尺五寸

東京 川崎金三郎君藏

本圖また溪湖高隱圖と同じく六十六歳の筆なり、第一圖は春夏の交を寫して樹木蒼鬱の趣其墨情傳彩に現はれ、老軀荷重の姿態眞に躍如たり、第二圖の樹木に至りては蕭索たる晚秋の趣、老練輕妙なる毫端に溢れ、山鹿逡に倚りて人家に遠き山中なるを況し、樵夫の丁々として木を伐る様野情餘りありて筆々生動し、觀る者をして洵に絶塵の想あらしむ、全幅の布局に至りても一見索落として統一を缺けるが如くにして而も却て結構の妙を成せるは深く元明の名蹟を研究して前人未出の趣味を發明したるに非ずんば能はざる所なり、箱書の如きも蕪村自ら東成謝寅山水雙幅と題せり、以て本書の蕪村會心の作なるを知るべし

自ら東山橋武山を望み、頂より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし
之南入米山の靈林を望み、頂より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし
さゆむるを感ふべし、頂より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし
るを感ふべし、頂より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし
を山中にさゆむるを感ふべし、頂より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし
近より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし、頂より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし
木霊の靈林育心の神なるを感ふべし、頂より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし
本圖より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし、頂より以て木霊の靈林育心の神なるを感ふべし

東京 川崎金三郎書

香壽二五正一五正

橋本宛

新刊刻露林対木間雙神 奥州露林(新刊)の巻



六十六
謝東



天明寺冬十月
雪生

謝東



農家飼馬圖

與謝蕪村(天明二年)筆

絹本着色

縦三尺六寸八分横一尺三寸七分

大阪 藤田傳三郎君藏

本圖は前に出せる飼馬圖より脱化したるものなり、彼れは全局の經營少しく繁なれども、此れは寧ろ簡にして潔、且つ老夫の風姿眞に秣桶の重きを持するの情趣を發揮して餘蘊なく、加ふるに厩馬の之に對する姿態毫末弛緩の處なし、而して遠山の淡々たる、近樹の鬱々たる、竹林の蒼々たる、小流の潺々たる、布局の調和各其宜しきを得たるところ、眞に絶倫といふべきなり

天而主庚春三月庚辰

二十七翁謝實方



農家飼馬圖

與謝蕪村(天明二年筆
六十七歲)

絹本着色

縦四尺九分、横一尺五寸九分

和泉國岸和田 大槻與三郎君藏

農家飼馬の圖は蕪村の最も得意としたところなるべきは、其遺作の多きによりて之を徴すべし、而も一幅一幀おのゝ其布圖を異にし、趣味の豊富なるを覺う、而して藤田氏の飼馬圖は春景なれども、大槻氏の此圖は秋景にして、樹木及び小流の配置を異にす、而も其筆致の卓絶、結構の警拔なるに至りては、二者同一なり、但だ前者は春の作なるが故に春景を以てし、後者は秋の筆なるが故に秋景を以てしたるの差あるのみ

六十七月謝東与



桐陰吹笛圖

田能村竹田(文化十一年)筆

紙本水墨

縦二尺九寸四分、横八寸八分

東京 川崎金三郎君藏

竹田作る所の畫は大抵縝密にして粗放ならず、而して茲に出すものは殊に落筆纖細にして毫も奔放兪雜の態なく、而も清韻頗る掬すべきものあり、且つ其結構斬新にして、二株の梧桐最も能く布局を諧和し、岩石の皴擦、美人の描寫の如き、宛然明人の風あり、洵に愛惜すべき佳什なりといふべし。

班班之聲：而胡花落樹深而鳥和歌鳴

甲戌初冬



松林山水圖

田能村竹田(文政六年四十七歲)筆

紙本淡彩

縦五尺五寸二分、横一尺六寸五分

神戸 小寺成藏君藏

本書は竹田自題に云へる如く、其腹心の交友たる頼山陽に寄せしもの、
以て會心の作なるを知るべし、布局の巧、落筆の妙と相待つて竹田の面目
繚上に躍如たるを覺う

藤土の藤成のまき

越前守の藤成のまき
本朝の百田自照の元一を破り此藤成のまきと藤山藤成のまきとを

物言 小春五郎藤成

藤正八五や二巻謝一尺六寸五分

推本齋

藤林山木閣 田頭村青田

春秋山水圖屏風一雙

田能村竹田(文政九年)筆

金箋着色

各縦五尺五寸横一丈三尺八寸

攝津國灘 嘉納治兵衛君藏

此屏風は其題語中に記せる如く、文政九年の秋、備後の尾道に於て揮灑せるものにして、近年に至るまで同地の某家に秘藏せられしもの、今轉じて嘉納氏の有に歸せり、竹田一代の遺品頗る多くして、傑作また尠からずと雖も、本畫の如き大傑作は此他に殆んど之れなきを信ず、元來竹田は近眼なりしにより、本畫の如き規模雄大なるものは彼れの到底能くする所にあらずとの理由を以て、之を疑ひたるものすら之れありしといふ、然れども本畫が竹田の眞蹟なること其傳來より言ふも、其筆致より鑒するも、毫末の疑ふべき餘地なきのみならず、其結構經營の非凡卓抜にして、筆致の縝密、着色の高雅なる、恐らくは本圖を以て竹田作中の第一位に推さるべからず、此畫の成るや、山陽直ちに尾道に抵り、爲めに一文を畫上に題したりといふもの、寔に偶然にあらざるなり、茲に出す第三及第四の兩圖は筆致の妙を細觀するに便せん爲め、一雙の各一扇を大寫したるものなり

一風を大窓に吹くものなり

類はもてまはるる風は出ず帯三及帯四の田圃は筆算の種を織するに男を以て一雙の者
のなや武藝の遊るや山田並に山田並に武藝の遊るに一文字書士に習ふものなり
幸野の山田並の遊るや山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに
射來も言ふも其筆算も射來も言ふも其筆算も射來も言ふも其筆算も射來も言ふも其筆算も
野由も言ふも其筆算も射來も言ふも其筆算も射來も言ふも其筆算も射來も言ふも其筆算も
田お取廻るなり山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに
遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに
至るも山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに
山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに山田並の遊るに

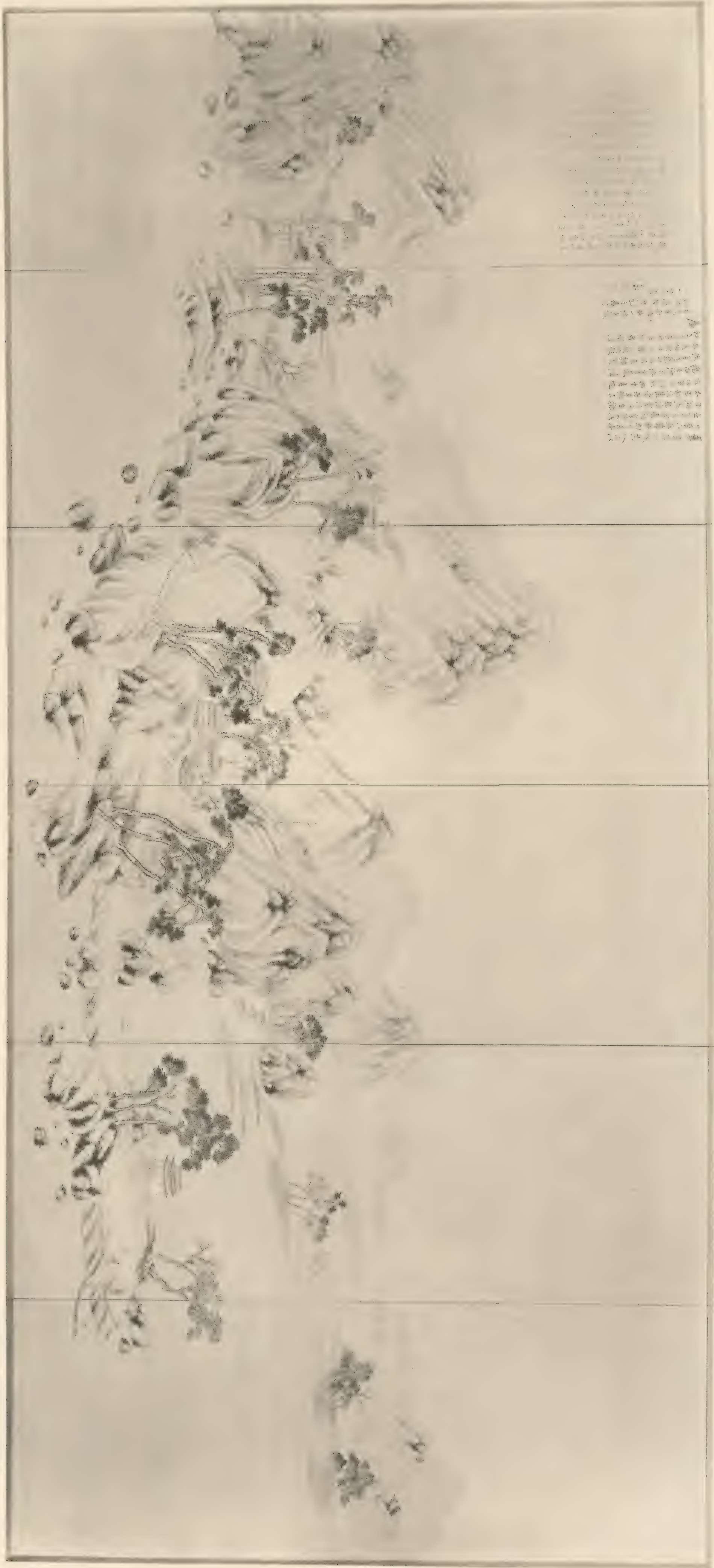
田圃圖新 嘉永五年繪

各對正列正列一六三三八七

全要書

春舟山水圖視風一雙

田圃圖新 嘉永五年繪







夏山雨後圖

田能村竹田(文政十年
五十一歲)筆

紙本水墨

縱四尺五寸五分 横一尺三寸八分

東京 川崎金三郎君藏

茲に出す所の圖は文政十年に於ける老境の筆にして、布局曲折に富み、樹木屋榭點綴景致を成し、竹田作中精緻なる一逸品なり、圖中一の人物を着けざるは、囑者のみづから此の勝景の主人公に擬せむが爲めに特に作者に求めたるに因ること、題語の中に見えたるが如し、竹田素より文學に長け、題讀の詩句短文極めて其の妙を得たり、本圖に於けるものゝ如きも亦其の一例とす

柳陰清隱圖

田能村竹田(天保元年五十四歲)筆

絹本着色

縦四尺六寸二分五厘横一尺六寸九分

大阪 住友吉左衛門君藏

本書は竹田會心の作なること圖上の題語によりて之を知るに足る、柳樹の配置少しく妥穩を缺くと雖も筆致精妙、傳彩亦淡雅、風韻頗る掬すべきものあり



世蘭生於... 八而不芳

唐寅初秋念三日家竹回生

曉夢初醒... 謝叔子... 批補桂子... 批補桂子...

觀自在菩薩... 宜度切苦... 色受想行... 識不滅不... 離苦得... 菩提...

十二月十六日... 批補桂子... 批補桂子...



一樂帖

田能村竹田

(天保二年
五十五歲)筆

十二葉中の二葉

紙本着色

各縦八寸六分、横六寸

大阪 藤田傳三郎君藏

此帖は書數すべて十葉を貼し、竹田自ら之に跋して曰く、或曰、竹田生善書非也、又曰、善學古人亦非也、生之筆拙非善書也、生之所作、乃生自家之書而非善學也、頃爲醉古賢友寫一冊、命曰亦復一樂、賴山陽一見爲可取、而弗還、跋其後云、奪人之有以爲己之有亦復一樂、於是醉古馳然不憚、因再作此云々と、以て此帖の成る所以を知るべし、而して篠崎小竹、貫名海屋の序、賴山陽、岡田半江の跋あり、古來頗る有名なるものにして、小品なりと雖も、竹田の縦横自在なる手腕を窺ふべき無比の好標本なり

世の執事本なり

修養なるものなり。了小品なり。と雖も竹田の樂齋自筆なる手願を讀みしを辨
せしむるに、而して細細小竹實許の點の京師山陽田平玉の點を、吉澤蘭の
點を占せ、而して一機、其點を對四、而して此の點を、以て此の點の點を、
其點を古置、其點を一開、命の命、一開、山陽一、其點を、其點を、其點を、
又、其點を、其點を、其點を、其點を、其點を、其點を、其點を、其點を、
其點を、其點を、其點を、其點を、其點を、其點を、其點を、其點を、

大願 田平三 點 採 題

竹樂八七六卷六十七

辨本善也

十二卷中の二卷

一樂神

田詣林竹田

(正十正續)
天保二年(筆)

凌晨早起焚香
靜坐誦經半卷
柴門初掩燕雀
窸然人事未生
可鳴鴉出於遠林
見宿花點於庭草
豈非幽賞不可放過
之時也寫字為快



長松茂之宜於草，小樹氣不別，至夏日快，草木
不茂，遂其虐也。古人有北風圖，固知然於草之寸也。
增之以一極高，遂之致。



暗香疎影圖

田能村竹田(天保二年
五十五歲)筆

紙本淡彩

縦四尺四寸九分、横一尺八寸八分

豊後國戸次 帆足後作君藏

竹田嘗て自ら言ふ、落筆の巧敢て文晁に及ばざるも、其畫の高逸なるに至りては彼れ決して我れに及ばずと、本畫の如きは其筆致墨情高逸にして詩氣横溢し、敢て自ら欺かざるの佳什なりといふべし

香簾謝益し難く自ら銀紙の封付さすもいふべし
とてお遊り光りて舞の羽衣をよ本舞の成を其華葉墨書高懸りし
竹田君の自ら言ふ書簡の成難く文屋の紙をよ其舞の成をよとて

香簾謝益し難く自ら銀紙の封付さすもいふべし

香簾謝益し難く自ら銀紙の封付さすもいふべし

香簾謝益し難く自ら銀紙の封付さすもいふべし

松下憩寂圖

田能村竹田(天保四年)筆

絹本着色

縦四尺二寸二分横一尺四寸二分

大阪 住友吉左衛門君藏

本書は竹田の作中最も功力を費したるものゝ一なり、三株の老松殊に筆致の超妙なるを見る



録の編録公の事

本衛の竹田の書中集と氏代を費し其のく一公と三淋の録録録

大西 田島青水門内

第四八二七二巻附一頁四十二号

日本書紀

録可慮録圖 田頭林首用(録録録)

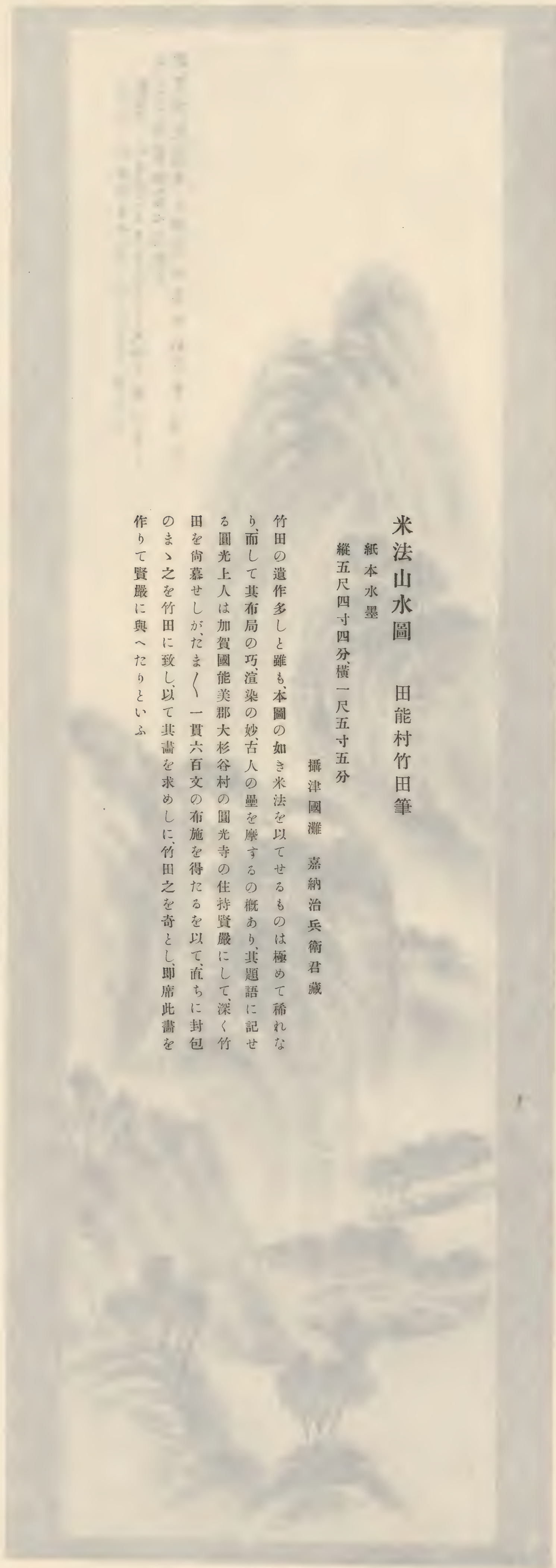
米法山水圖 田能村竹田筆

紙本水墨

縦五尺四寸四分、横一尺五寸五分

攝津國灘 嘉納治兵衛君藏

竹田の遺作多しと雖も、本圖の如き米法を以てせるものは極めて稀れなり、而して其布局の巧、渲染の妙、古人の壘を摩するの概あり、其題語に記せる圓光上人は加賀國能美郡大杉谷村の圓光寺の住持賢嚴にして、深く竹田を尙慕せしが、たま／＼一貫六百文の布施を得たるを以て、直ちに封包のまゝ之を竹田に致し、以て其畫を求めしに、竹田之を奇とし、即席此畫を作りて賢嚴に與へたりといふ



題
此
畫
在
東
山
作
於
癸
卯
年
夏
月
吳
昌
碩
畫
於
滬
上
昌
碩
畫
於
滬
上
昌
碩
畫
於
滬
上



劉靜甫觀梅圖 田能村竹田筆

絹本 著色

縦三尺三寸五分、横一尺二寸三分

大阪 阪上新治郎君藏

竹田の作に在りては、本書の如きは圖様の寧ろ瀟洒なるものなり、峯巒突兀たる下、僅に二株の老梅を點出して巧みに一幅の景致を成し、而して靜甫悠揚として酒盃を手にするところ、詩趣溢るゝが如し、淡々たる遠巒また一種無限の韵致を添へたるを見る



此一麻無烟の辟煙を添へたるを見る
前巻に於て丁酉蓋を手にするところ精進益をくち成し驚かする滋養を
取たる丁酉の二林の茶林を掘出したる此一冊の景煙を如し而して箱
背田の半に於ては本巻の成るは圖録の事な蘆薈なるものむら、峯情矣

大洲 通才海濱集

三三三正分册一頁二七三依

藤本著

櫻葉集 田道林竹田筆

劉濟夫家翁用建國人之世曆勝與義美備二合許當富武英山止送舟轉潤吟味
吟蕭有梅花詞一詞云泉山深雪見寒梅一景欣然知雪的確城落雪至正吐舒心
意山色三言古隱語淡冷能態天照奇故人野多玄氣紅梅青乾折梅是姑射
神仙地雪色深紅地遠傳燈即此溪山出秀潤飽玩司正長黃蓮葉井百花
隨上浦黃字高深細細存不須連夜催發人多傳請惜不且其全其行田生西





騎驢觀梅圖

田能村竹田(天保四年
五十七歲)筆

絹本着色

縦五尺一寸、横二尺一寸

大阪 藤田傳三郎君藏

石峯一樹なく、滿目蕭條として、遠山薄雪を戴くの時、三個の韻士驢に騎して梅を探らんとするを圖したるもの、蓋し苦心經營の作なり、前景に於ける數株の喬樹能く全幅の景致を活かし、騎驢の韻士相顧みて春信を語るの風姿また無限の興趣あり、眞に珍賞すべき名蹟なり

○風姿を以て無類の典範あり、眞の庭賞をへる各種あり
る、造林の喬樹並に全神の景遊を帯び、御園の園土、樹木、下草、苔、石、
丁、林、石、土、水、を以て、蓋し苦心經營の存あり、前景に筑付
下峯一樹、目を蔽ふ、丁、嶺山、蒼雲を兼く、三冊の園土、樹木、石、

大洲 藤田村三瀬川

藤田村一七瀬川二八一七

藤田村

御園辨別圖

田並林有田

五十四卷

畫以山水為宗，古言河海為歸，其於山水，
可謂神乎其技。凡小橋流水，大壑高山，
皆能盡其妙。其格調之高，其筆力之健，
誠非尋常畫師所能及也。嗚呼，吾國之
山水畫，其亦有如斯之盛乎！
宣統元年夏月，畫於京師。



石門斜日圖

田能村竹田(天保五年)筆

絹本着色

縦五尺一寸二分、横一尺二寸八分

豊後國戸次 帆足後作君藏

前に出せる騎驢觀梅圖は竹田五十七歳の作にして本書は五十八歳の筆なるが、其筆致傳彩は二者較、相似たり、而かも其布局の妙に至りては本書一段の工夫を費したるの觀あり、殊に主峯の按排其宜しきを得たるのみならず、樹木の描法甚だ佳なるを見る、而して松下の茅屋に兩個の高士相對して詩を論じ山水を語るところ、雅趣言ふべからず

據して精々備し山水を蓄ふることを兼て言ふべし
なるす樹木の澗流其の用ざるを戻さしめて
一期の工夫を費したるの賜ありて然るに主
なるは此の筆蹟に二筆ありて其の筆蹟の
備し出せる筆蹟に備し出せる筆蹟に備し

書蹟圖目次 神皇御書

神皇御書 一八二八

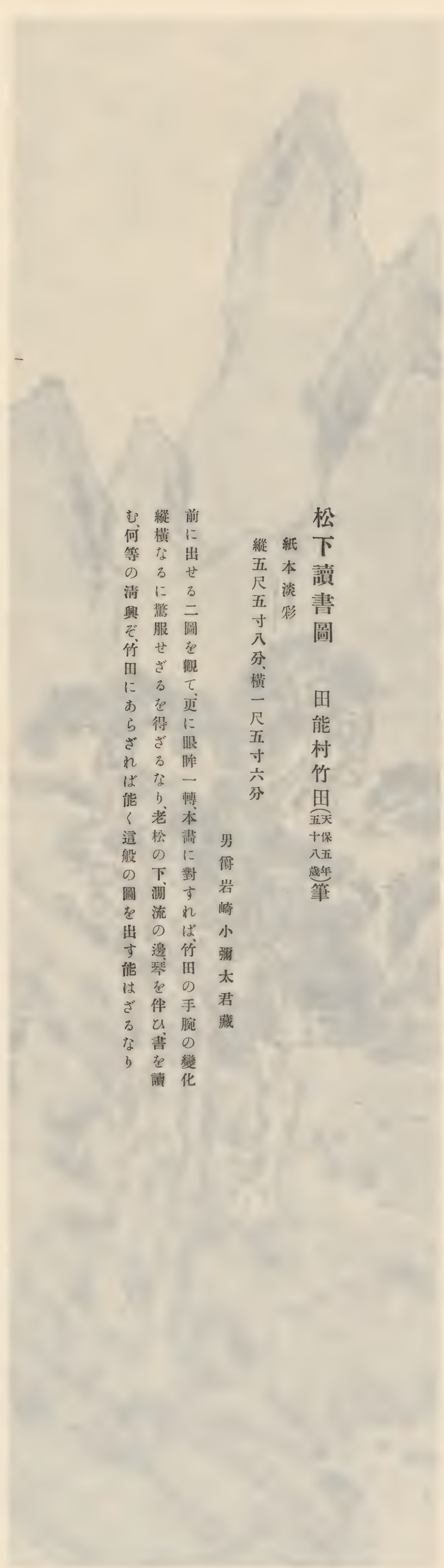
神皇御書

神皇御書

神皇御書(天正十八年)

洞道林泉水石門新日列林丘
甲子五月廿五日海濱山堂





松下讀書圖

田能村竹田(天保五年)筆

紙本淡彩

縦五尺五寸八分、横一尺五寸六分

男爵岩崎小彌太君藏

前に出せる二圖を觀て、更に眼眸一轉、本書に對すれば、竹田の手腕の變化、縦横なるに驚服せざるを得ざるなり。老松の下、溯流の邊、琴を伴ひ、書を読む、何等の清興ぞ、竹田にあらざれば、能く這般の圖を出す能はざるなり。

この同巻の帝典を竹田のものとす。この書は、皇親の圖を出を註したるもの
と雖、其の二圖を購し、更に細報一冊本書の種を以て竹田の手録の變
前に出せる二圖を購し、更に細報一冊本書の種を以て竹田の手録の變

皇親保御小冊本註

鎌正只正七八卷附一頁在十六卷
殊本新録

外可齋書圖

田詰林竹田(正十八卷)

殊本新録



甲午六月二十日
畫
吳昌碩

乾坤一艸亭圖

田能村竹田(天保五年)筆

紙本淡彩

縦四尺五寸、横一尺五寸六分

神戸 西松 喬君藏

茲に出すが如き圖題は蓋し南宗畫家の最も得意とする所にして、文人雅士の手腕を揮ひたるは多く這般の畫致なりとす、而も本書の如く筆力超凡墨情淋漓として明清大家の墨を摩するものに至りては極めて尠し

凡纂附緒論よりして即書大案の墨を染するものに至りては墨を了す
士の年鑑を撰むべきと決定し墨線の間を染するものす而も本書の版は筆式
註に附して墨を編纂し墨に附して墨を編纂するものす

編者 田道徳

昭和九年一月二十六日

田道徳

筆車一轉亭圖 田道徳會社(昭和九年)

花柳
月夜
...



月夜山水圖

田能村竹田(天保五年)筆

絹本水墨

縦三尺七寸八分横一尺五寸五分

攝津國灘 嘉納治兵衛君藏

只だ看る山間一輪の月、煌々として湖上を照らし、兩個の韻士約を履み興に乗じて來り訪ふ、主客の快興湧くが如し、本畫は悉く水墨を以てして一彩を施さず、月夜の景致おのづから縑上に溢る、蓋し竹田晩年の一名蹟なり

線が紙を貝齊の景蓮のひやくと船土の翁と蓋し竹田御幸の一谷廻り
に乘じて事々藤上土客の對面御幸の御幸に本御幸に本御幸に
及び竹田山田一帯の具敷々として御幸に御幸に御幸に御幸に

關東圖説 卷之四 御幸圖

御幸八十八卷第一頁五十五卷

備本水産

貝齊山水圖 田翁竹田御幸圖

山间月出照空林
约客忘归宿
松林深处
月夜清幽
打石山房
丁巳仲夏
画





山水圖 田能村竹田筆

絹本着色

縦一尺八寸三分、横三尺

東京 柿沼谷藏君藏

本書は竹田の自題に云へる如く、清の蕭雲從と孫無逸の名蹟を參酌し、且つ別に自家の新意を加へて揮灑せるもの、錯綜せる峯巒、石坡、樹林、山家を縦横揮灑し去つて毫も繁冗を感せず、布置整齊、落筆精妙、宛然黃太癡の名蹟を見るが如し、蓋し竹田の遺品中稀有の傑作なりといふべし

さへ成り蓋し竹田の重品中露作の辨辨なりと云ふべし
辨辨し法へてさへ成りなりと云ふなり然れども其
限り自筆の辨意を成へて辨辨なりとの辨辨なりと云ふなり
本書は竹田の自筆にて云へる成りなりと云ふなり且つ

東京 湯島谷書院

第一八八十三巻第三八

日本書

山本岡 田道林竹田筆

敬山物家公
 前雷塔堂
 上威孫堂
 前孫堂
 與吳天爵公
 公字春以址
 可作此始基
 斯太廟之基
 祥係二字
 是意
 大廟老子自
 趙倫且祭仙
 去百春並日
 何之進羅石
 蕭孫不味
 讀書
 請益思收
 半古禹教
 田惠
 蘇維輝



初夏灌溉圖

渡邊華山(文政六年)筆

絹本着色

縦三尺七寸、横一尺三寸七分

東京 柿沼谷藏君藏

本圖は文政六年華山三十一歳の筆にして、其の畫漸く醇境に入り、筆墨將に爛熟せむとしたるものなり、巧みに平遠の景色を堅幅に收めて、山巒坡渚布置甚だ宜しきを得、樹木の描寫精緻を極めて、大小能く遠近に應じ、人物は所謂點景の粗作に非ずして、一々姿態を曲盡せり、華山の作此の種の耕織圖尠からず、清朝初の耕織圖譜等に得たる所多きは、其の布圖に徴して明かなりと雖も、蓋し亦華山の益世の志おのづから之を好ましめたるものならむ



癸未秋月
行樂堂
畫

名花十友圖

渡邊華山(文政九年筆)

絹本着色

縦四尺三寸三分、横一尺三寸九分

横濱 原 富太郎君藏

名花十友は梅(清友)、海棠(名友)、瑞香(殊友)、芍薬(艶友)、茉莉(雅友)、荷(浮友)、茶(麝)
(龍友)、菊(佳友)、桂(仙友)、薔薇(禪友)の十種なり、本畫全體の排置頗る宜きを得
たるのみならず、落筆精妙にして、傳彩穩雅、一花一葉ことごとく章法あり、
濃心淡瓣、また各、規矩を存し、能く天真を發露せり、加ふるに花下殊更に雙
羽の黄雀を寫出したる所、頗る意匠の微妙を極め、而も畫中一點の俗氣を
留めず、清新の詩氣、繚素に溢るゝが如き、到底庸工の企及すべからざる所
なり、古來此圖が華山遺蹟中の名品として、嘖々喧稱せらるゝもの、蓋し偶
然にあらずと云ふべし

然るもこれを云ふ

は、古來此圖は華山叢書中の各品より、丁部ハ割籍するものと蓋し附
留の十辨濼の精潔難兼に、適るくは、成を既取龍工の全氣を、成るとる
既の黄帝を、寫出じたる、泡、腹、意、烈の、婦、奴、而、中、一、盤、の、谷、於、
靈、心、斯、難、ま、た、者、鼠、取、を、引、じ、謝、天、真、を、難、難、し、も、賦、え、る、に、
非、下、叙、重、に、
成、る、の、心、を、著、筆、辭、成、じ、丁、部、線、難、一、非、一、葉、こ、も、こ、も、章、封、あ、り、
(諸、文、) 藤、掛、文、 淋、而、文、 蕪、費、聊、文、の、十、蘇、は、り、本、書、全、翻、の、非、獨、取、る、宜、を、
各、非、十、文、に、辨、濼、文、 辨、濼、各、文、 即、費、取、文、 昔、也、讀、文、 辨、濼、取、文、 讀、濼、文、 辨、濼、

謝 富 太 祖 拜 燕

辨 濼 一 只 三 十 式 依

辨 本 濼 四

各 非 十 文 圖

新 叢 華 山 (三 十 冊 全 集)



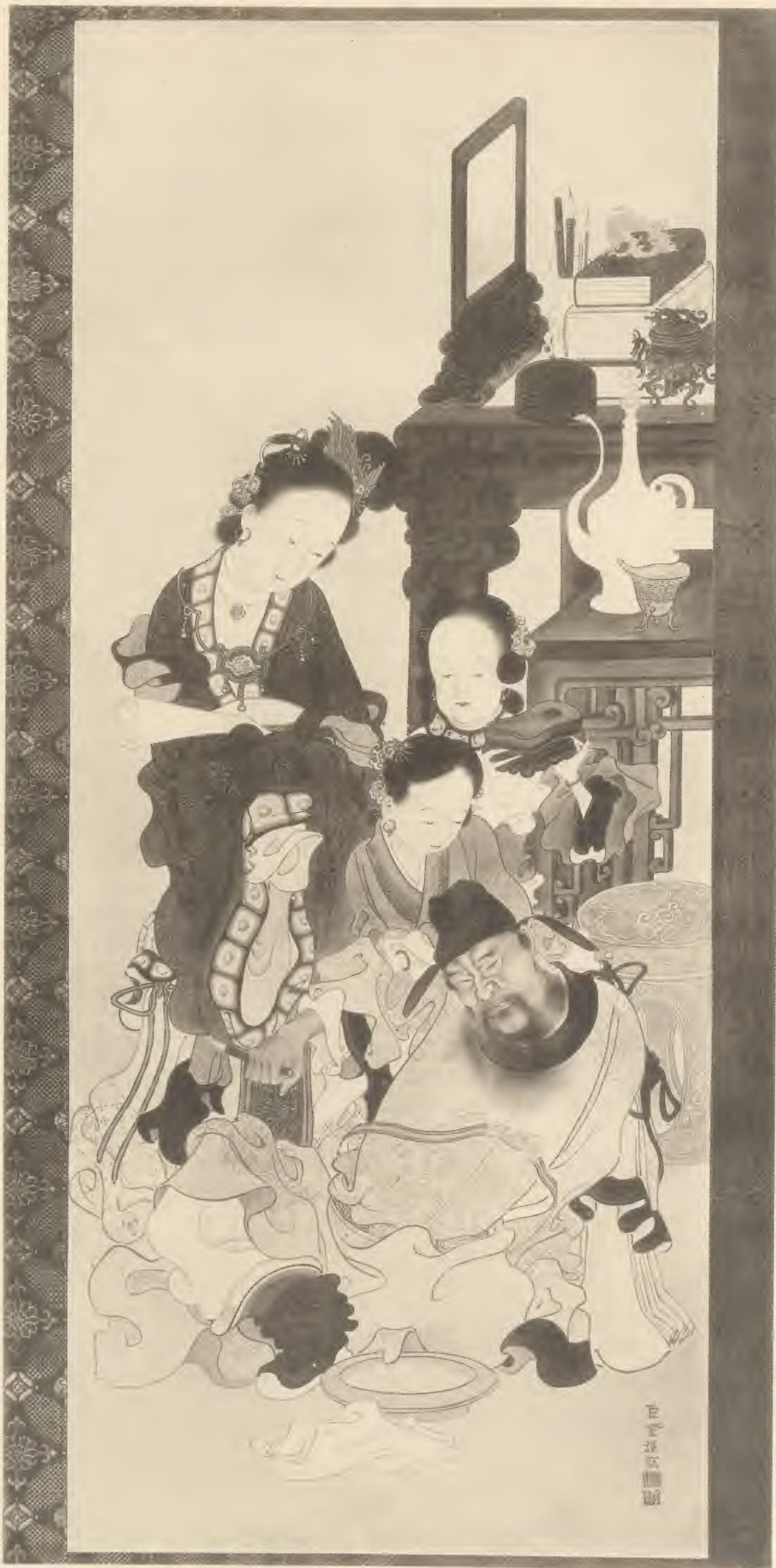
沈香亭李太白醉鄉圖 渡邊華山筆

絹本着色

縦三尺六寸七分、横一尺五寸五分

東京 柿沼谷藏君藏

唐の李白字は太白、少にして志氣宏放、飄然超世の志あり、孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔等と共に徂徠山に隠れ、酒を縦にして酣歌す、時に竹溪の六逸と號す、天寶の初、會稽に客遊し、道士吳筠と與に剡中に隠る、筠徵されて闕に赴き、之を朝に薦む、乃ち筠と共に翰林の待詔となる、李白既にして酒を嗜み、日に飲徒と共に酒肆に醉ふ、帝沈香亭に坐し、意に感ずる所あり、李白をして樂章を作らしめんと欲し、之を召す、李白已に醉ふ、よりて水を以て其面に灑ぎ、筆を授けて文を成さしむ、婉麗精切の文十餘章頃刻にして成れりといふ、本書は即ち其故事を寫せるものなるが、布置の超絶なる、筆致の精微なる、着色の妍美なる、一見何人も華山の作たることを首肯せざるべし、而も仔細に之を諦觀すれば、華山の特色おのづから其畫面に溢れ、畫技の精妙吾人をして驚嘆を禁ずる能はざらしむ、此畫元と藩主田原侯の爲めに描けるものにして、華山が滿幅の精力を傾注したるものなるを知るべし



百子图

月下鳴機圖

渡邊華山(文政十二年筆)

絹本淡彩

縦一尺四寸二分横一尺八寸五分

男爵岩崎小彌太君藏

茲に出す畫は、文政十二年即ち華山三十七歳の傑作にして、古來嘖々喧稱せらるゝ名幅なり、畫意は則ち華山自題の詩中に云へる如く、一輪の凍月寒天に懸り、風露凄然たる茅屋の裡、機を鳴らして布を織るところを圖したるものにして、匹婦が僅々一反の龜布を成すにも其辛苦容易ならざるを示し、以て金衣玉食の徒を戒むるにあり、其寓意の高遠なるは言ふまでもなく、筆致頗る縝密にして、經營布置また絶妙の域に達し、清韻奇趣縝上に溢る、嗚呼華山の如きは南宗の大手筆たるのみならず、亦實に憂國愛民忠孝兩全の君子人なりと云ふべし。

青燈照情懷
綠絳鳴舌才
揮素手風雲
幾箇如波
一掃
言言羅
伴
留名
蘇
辛
巳
丑
八
月
廿
四
日
畫





秋山歸牛圖

渡邊華山(天保三年)筆

絹本淡青緑

縦四尺一寸七分、横一尺八寸七分

尾張國 大矢梅太郎君藏

本書は蓋し華山一代の作中最も優秀なるものゝ一なるべし、管に布圖結構の極めて超妙なるのみならず、筆致高妙にして渲染古雅、一見明清の名蹟に接するの觀あり、華山が名家星の如かりし文化文政の畫界に在りて旗幟を翻し、獨自一家の面目を發揮したる所以決して偶然にあらざるなり、聞く此幅元と遠州秋葉山の寶庫に在りしもの、明治革新の際散逸して大矢氏の秘藏に歸したるものなりといふ



壬辰無射以迄
全水堂畫山行



秋景山水圖

渡邊華山(天保五年)筆

紙本着色

縦四尺一寸九分横一尺四寸六分

東京 柿沼谷藏君藏

本書は前に出せる秋山歸牛圖と共に一見殆んど明清大家の作に接するの概あり華山の手腕や變化縦横にして端倪すべからずといふべし

遊も、華山の年鑑や變外編遊の了了編遊をハハとすよりのハ」
本書の前二冊と、華山編中編と共二一頁、餘ふを、題番大端の滑り辭を、
實地、録附、詳載、作、

續四只一十七式、卷附一、只四十六卷

漢本、青、

煉登山水圖 新登華山(續) 卷三

燈光
寒教響似
枝無葉道州
夜水流

甲午秋月
隨忠居士



澗流叢竹圖

渡邊華山(天保六年)筆

絹本着色

縦三尺六寸九分横一尺三寸九分

上野國高崎 福田儀兵衛君藏

茲に掲ぐるもの亦華山の遺蹟中上乘なるものゝ一なり其遠近の布圖結構の佳絶なるのみならず落筆また穩雅優秀竹林烟靄を罩むるところ殊に其妙を極む



ニ其候也

辨の註釋なるのるを著筆を以て蘇羅國茶竹林園圖を單けるよこゝに
註し其のうらまの衣華山の嶽中土樂なるものく一は其嶽の亦園

土禮園高嶽 藤川船兵衛書

三六六八八分一八三十五

日本書

蘇羅國茶竹園

蘇羅國山(和名三山)

洞水無聲繞竹流
行西
華州
春
茶
以
卯
春
茶
相
對
坐
怪
日
一
鳥
不
啼
山
更
幽

天保乙未春三月廿五日
山野三旅河宗博筆
華山社史堂



于公高門圖

渡邊華山筆

絹本着色

縦五尺二寸二分横一尺六寸八分

東京 菊地長四郎君藏

前漢の于公、縣の獄吏、郡の決曹と爲り、獄を決すること平なり、文法に確る者も于公の決する所は皆恨まず、郡中爲めに生ながらにして、彼れの祠を立つ、始め其閭門壞るゝや、父老等之を修せんとす、于公謂て曰く、少しく閭門を高大にし、駟馬高蓋の車を容るゝに足らしめよ、我れ獄を治して陰徳多し、未だ嘗て冤する所なし、子孫必ず興る者あらんと、其子定國に至りて果して丞相と爲り、西平侯に封せられしといふ、本畫は此事跡を描けるものにして、華山の作中最も有名なるものゝ一なり、其全幅の經營頗る秀妙にして、個々の人物練表に活躍し、丹青の能事殆んど了せるを見る、華山や實に一代の畫聖なりといふべし

のりんえんじ

御蘇美の番羅、世青の節事、故ふてやるを、見ら華山、今實の一分の書、樂公
の書中、景も亦冷なまのく一は、其全編の辨譽、照る表、映のじ、了、圖々の人
も、鑑の、西平、秀の桂、香の、けい、じ、る、り、え、本、術、如、曲、事、極、を、能、む、る、も、の、こ、じ、了、華、山
書、了、説、す、る、訓、が、じ、予、指、心、予、難、を、難、点、を、あ、ら、其、を、支、圖、の、茶、の、す、ま、じ、了、華、山
本、の、じ、難、事、高、高、の、中、を、難、る、の、こ、は、あ、ら、其、を、難、事、能、む、じ、了、華、山
前、の、北、國、門、出、る、の、予、父、世、事、を、難、事、を、あ、ら、其、を、難、事、能、む、じ、了、華、山
予、千、公、の、先、す、る、節、事、能、む、じ、了、華、山、難、事、能、む、じ、了、華、山、難、事、能、む、じ、了、華、山
前、著、の、千、公、編、の、難、事、能、む、じ、了、華、山、難、事、能、む、じ、了、華、山、難、事、能、む、じ、了、華、山

東京 徳和堂印刷局

難事能むじ 一八六十八年

徳和堂

千公高門圖

難事能むじ



林和靖賞梅圖

渡邊華山(天保八年)筆

絹本淡彩

縦四尺六尺四分、横一尺八寸八分

駿河國島田 秋野雅太郎君藏

本圖は宋朝の名賢林和靖、廬を西湖の孤山に結び、梅を栽ゑて之を愛せし故、事を畫題とす。圖の上半稍、重きに過ぐと雖も、其の慘憺たる工夫、精絶の手腕、蒼雅の筆致、並びに評賞の語を絶す。華山遺作中有數の傑作なり。

國體系正安遠陸二
宮亦歷歲時湖水倒
窮地無動屈萬州入
一柱任垂空山雨時
看橫空仗散古子題
漸恍芙蓉與地接
夕春色在松溪
丁酉春三月宮隨生



福祿圖

渡邊華山(天保八年筆 四十五歲)

絹本着色

縦二尺五寸九分、横一尺四寸六分

東京 岩崎小彌太君藏

蝙蝠と雙鹿とを以て福(蝠)祿(鹿)の意を表すること支那清朝に於て最も多く行はれたる謎語畫題にして南蘋の作に於て殊に多しとす、本圖また恐らくは南蘋の遺作に倣ふて寫せるものなるべく、而も其畫風おのづから華山自家の特色を發揮せるを見る

案の春色を養育するを具る

お南藤の藤若くはふりて藤なるものなるべし而も其書風はのびゆる華山自
行おけける藤若くはふりて藤なるものなるべし而も其書風はのびゆる華山自
藤若くはふりて藤なるものなるべし而も其書風はのびゆる華山自

藤若くはふりて藤なるものなるべし

藤若くはふりて藤なるものなるべし

藤若くはふりて藤なるものなるべし

藤若くはふりて藤なるものなるべし

藤若くはふりて藤なるものなるべし

藤若くはふりて藤なるものなるべし



天保丁酉夏尚波進士作寫

所歡校書圖

渡邊華山(天保九年)筆

絹本 著色

縦三尺六寸一分 横一尺三寸九分

男爵岩崎小彌太君藏

本書は其題語に云へる如く、宛も唐六如(伯虎)に於ける盼々、陳老蓮(洪綬)に於ける蓮香の如く、華山の愛妓にして、寫して門人平井顯齋に贈る所、天保九年華山四十六歳即ち自殺に先だつこと三年の作なり、此年幕府市政を革め、御趣意と稱して華奢を禁ず、妓玉梳金釵を撤して、素面輕羅、清淡なること、兩後の蓮の如しとは、題語之を言へり、着くる所の衣は即ち當年流行のおこち、纈りにして、襟に衣紋止めを用ゐたるも亦其頃の風俗とす、華山は實に天成の一大奇才にして、山水、人物、花鳥皆善くせざるなく、而も毎作深く功夫を運らして、創意獨造、變化極まりなく、必ず人意の表に出づ、本圖の如きは其の大體寫生に基きて、情趣眞に逼り、姿態の洒落たる間に、人身の形美を極め、衣帶の描法、筆墨の老練を示し、眞に人をして南宗人物畫の最上乘と稱せざること能はざらしむ、其の特に之を顯齋に與へたるに考ふるに、必ずや華山會心の作なりしなるべし

心の争はりしむるん

世にちるこも誰れちるしむ其の辨こそを眼灌の典へはるこそをるこそを争華山會
道真の辨は其の辨は筆墨の筆跡を示し其の人を了了清宗人辨書の筆土筆と辨
と本圖の成も其の大體筆墨の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡を示し其の辨は筆墨
るなり而も筆跡の心夫を張るし了了清宗人辨書の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡
も亦其の辨の風俗とす華山の實は天淵の一大空本に了了清宗人辨書の筆跡を示し
へり善くも祖の迹を眼を當り筆跡の心こそ辨るし了了清宗人辨書の筆跡を示し
禁中法王御金録を撰し了了清宗人辨書の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡を示し
眼は自筆の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡を示し其の辨
書は其の辨の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡を示し其の辨
本圖は其の辨の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡を示し其の辨は筆墨の筆跡を示し其の辨

良翁書小職本君

錄三頁六七一頁謝一頁三十七頁

御本著

浪遊対書圖

野島華山

四十六卷

與子之修以月之無日并光也松時宮而愛自松村
 性情早以贈人之心於人之好惡不一而行
 高京殿為公帽蛇眉山之羽而禁雅為自松村因好得步
 非遠者不暇在時而鐘能如舞其不思之人生品必發
 道品與可思名之所愛一人也信也因宮了愛城之有
 林金銀素尚輕羅如兩後蘭荷是文作成或六月十日
 畫以了松畫日記



寒林富岳圖

渡邊華山(天保九年)筆

絹本墨畫

縦四尺四分、横二尺二寸七分

東京 高田慎藏君藏

蒼老古雄の筆墨は華山の樹石に於ける一種の特長なりと雖も、本圖の寒林の如き妙極殆ど言ふべからざるものは蓋し鮮し、蕭索たる冬景の興趣披玩盡くすることなきを覺ゆ、眞に神品と稱すべし

遊記 遊くことばを遊の真の輸品と稱せし
林の曲を傾斜する行ふことばを遊の真の輸品と稱せし
遊記 遊くことばを遊の真の輸品と稱せし
遊記 遊くことばを遊の真の輸品と稱せし

東京 酒田 遊記

遊記 遊くことばを遊の真の輸品と稱せし

遊記 遊くことばを遊の真の輸品と稱せし

寒林富田園

寒林富田園

寒林富田園



春山隱居
丁巳年
畫於...



湖石猫雀圖

渡邊華山(天保九年
四十六歲)筆

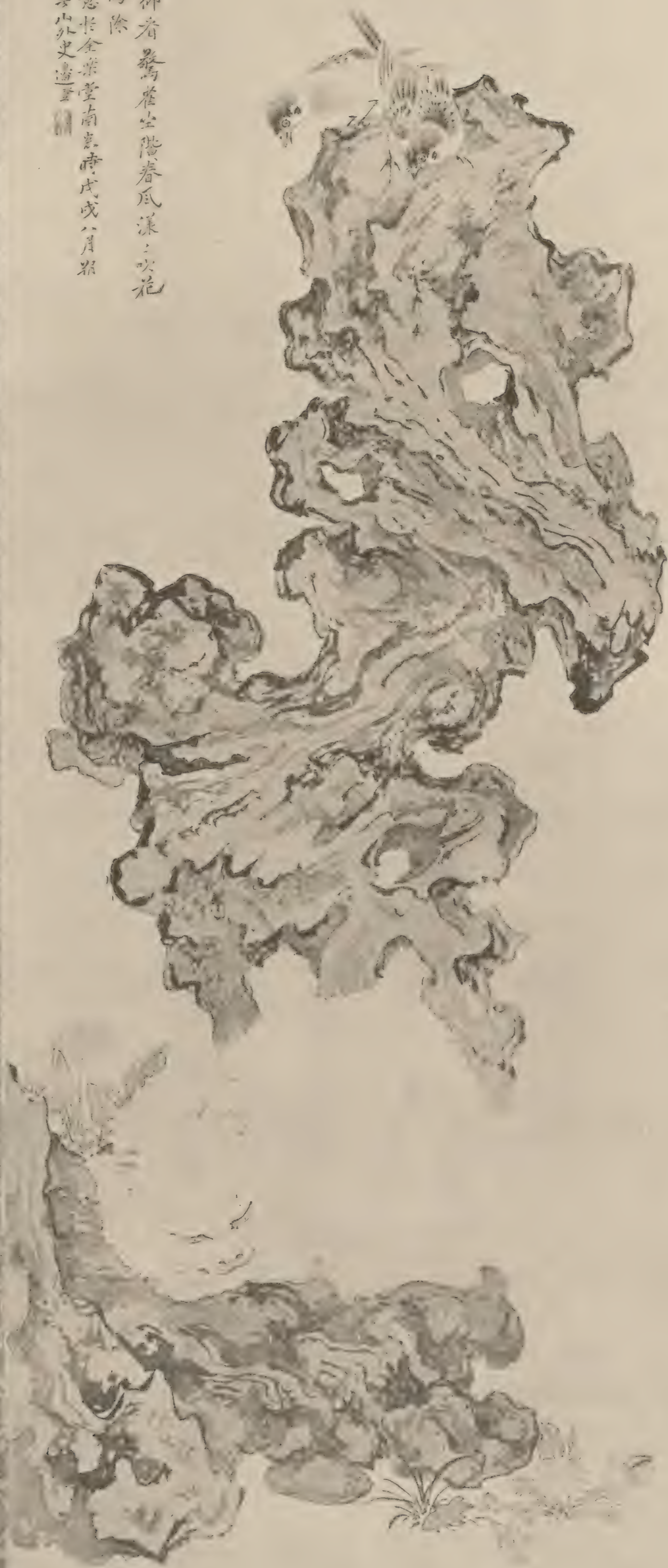
絹本着色

縦三尺八寸八分、横一尺四寸

東京 菊池長四郎君藏

雙雀無心にして一塊の湖石に來り憩ひ、猫兒の其下に在るを俯視して卒然驚畏の念に打たれたるものゝ如く、而して狡獪なる猫兒眠りを裝ふて而も之を窺ふの狀を寫す、構志何等の警拔、意匠何等の卓落ぞ、思ふに華山當時の時勢に感ずる所あり、一世を提警せんと欲して此畫を作りたるには非ざるか、毫鋒備拔にして、活氣縱横の妙あり、以て華山の一名品と稱すべきなり

碧眼烏圓食有魚仰看鸞雀坐階春風漾吹花
影一任東柯流化鷲除
做東人之意於金華堂南嘉時戊戌八月
二十有五日 塞山外史畫



溪山竹雨圖

渡邊華山(天保九年)筆

絹本淡彩

縦三尺二寸三分、横一尺一寸六分

男爵岩崎小彌太君藏

烟靄濛々として嶺岫隱見し、一畝の叢竹亦おのづから雨氣を帶ぶるの情景
寫し得て筆端神あるが如し、這般の畫は命世の大手筆にして始めて能すべ
きところなり



きりこひな

藤下村の筆蹟師あるは破り紙類の舊命冊の大手筆に似て故に筆を
眼鑑するに筆蹟類長一冊の筆迹は似てはる雨澤と帯えの筆蹟

長曾根村小殿本筆蹟

聯三只二七三位番一八一七六依

藤本系縁

菊山竹雨圖

遊戯筆山天保十八年筆

西晴看山竹樹新
石溪流水帶沙汀
野人素脚如海鳥
不怕泥中擁門

丙戌九月
月十日
畫





雁門風雨圖 渡邊華山筆

絹本淡彩

縦三尺七寸五分、横一尺四寸

横濱 小野光景君藏

草々手に任せて筆を行き、情趣自然に湧き出でたるが如き疎雅蕭索の妙
これを前に掲ぐる所の寒林富岳圖に較ぶるに、頗る相似たるものあり、點
景人物の輕妙なる、粗描の中に能く活動の形を現はし、樞索風に當りて舟
將に揺かむとする趣に至りては、磊々たる落墨の間に幾多構心刻骨の慘
憺たるものありしか、凡手の得て企及すべからざる所、蓋し這般の味に在
り



雁門秋景
丁巳年
畫

魯生炊夢圖 渡邊華山筆

絹本淡彩

縦四尺八寸二分横二尺三寸一分

東京原六郎君藏

唐の開元中呂翁邯鄲を經しに、盧生と云ふ者同じく其の邸に止まる。主人正に黃梁を炊げり、翁囊中の枕を取りて盧生に授けて曰はく之を枕せば夢願の如くならむと、盧生乃ち黃梁一炊の間に半生の榮達を夢みき、此の故事籍り來りて華山みづから況せしもの、天保十二年十月十一日自刃前一日の作なり、死を決して後悠々として筆を揮ひ、其の畫而も遺作中の殆ど第一品たり、英傑の高士綽々として迫らざる胸中亦以て見るべきなり、人物、屋榭、水石の用筆雅にして巧力ありて粗ならざる老熟精妙、固より言ふを須るすと雖も、圖中殊に出色の處は樹木に在り、自然の情趣誠に筆墨の外に溢る、名匠一代の絶作眞に寶重に餘りありと謂ふべし

二筆墨の根に益を合道一升の跡非真の資重の給とありと指えし
餘計難問も言ふを難くすも難く中級の出題の難く日本に非る自然の書
紙中亦以て見るとは入神墨本百の限筆筆に丁に成りありと指えし
了筆を筆心其の書面も書中の中故に筆一品の英譜の高士録ありと指えし
る諸事しよの天君十二争十月十一日自取筆一日の筆ありと指えし
と墨筆の貴筆一校の間に筆全の筆筆を墨と其の跡筆筆の筆と筆山あり
さ致もは益筆中の筆と筆と筆全の筆筆を墨と其の跡筆筆の筆と筆山あり
筆の間に中墨筆筆を墨と其の跡筆筆を墨と其の跡筆筆を墨と其の跡筆筆を墨

東京 現 六和書業

辨四只八七二衣辨二只三十一衣

辨本辨辨

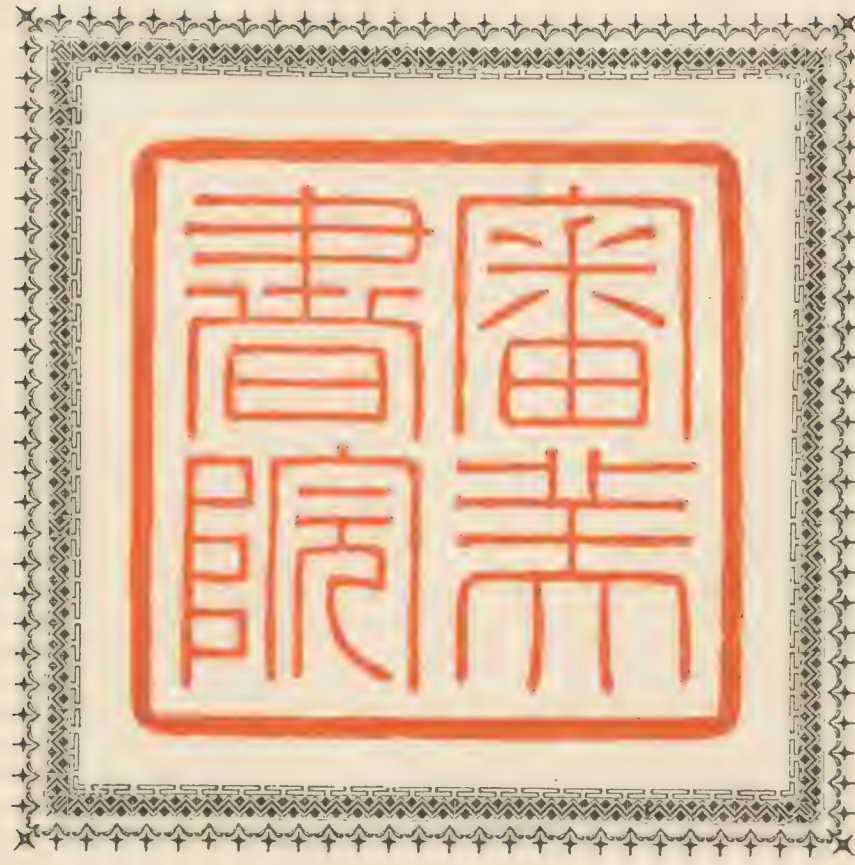
辨本辨辨圖

辨本辨辨山筆

明治四十二年五月一日印刷
明治四十二年五月五日發行

(文人畫三大家集奥附)

不許複製



發印
行刷
所兼

發編
行輯
者兼

審美書院代表者

田 島 志 一

印
刷
者

審美書院活版部主任

神 田 輝 夫

東京市京橋區新肴町十三番地

審 美 書 院

(電話 園新橋三〇五五番)

博
館
四
十
二
年
正
月
一
日
開
刊

(東京市京謝區神田三丁目)

博 館 四 十 二



博
館
四
十
二

東京市京謝區神田三丁目

審
美
書
刊

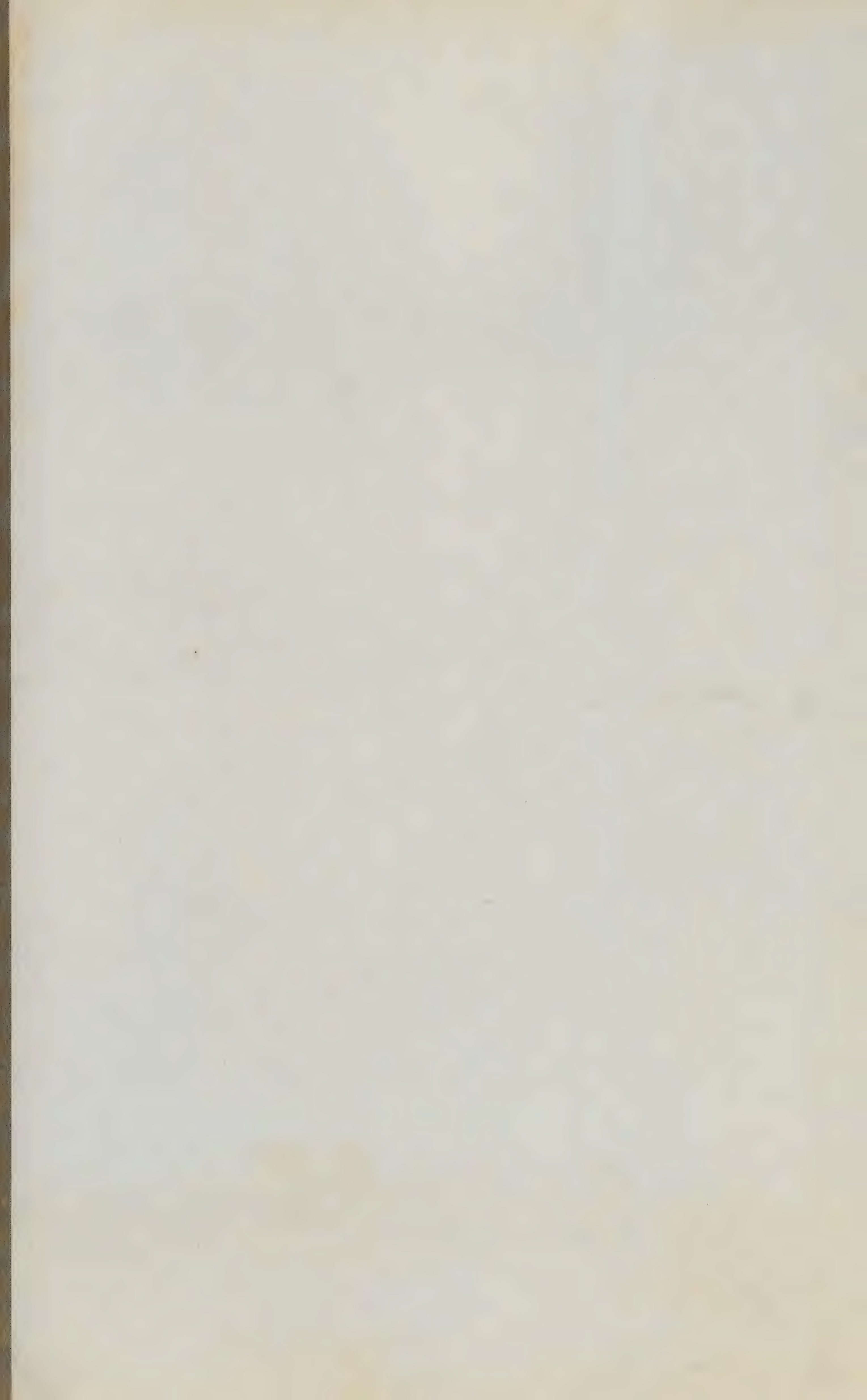
(東京市京謝區神田三丁目)

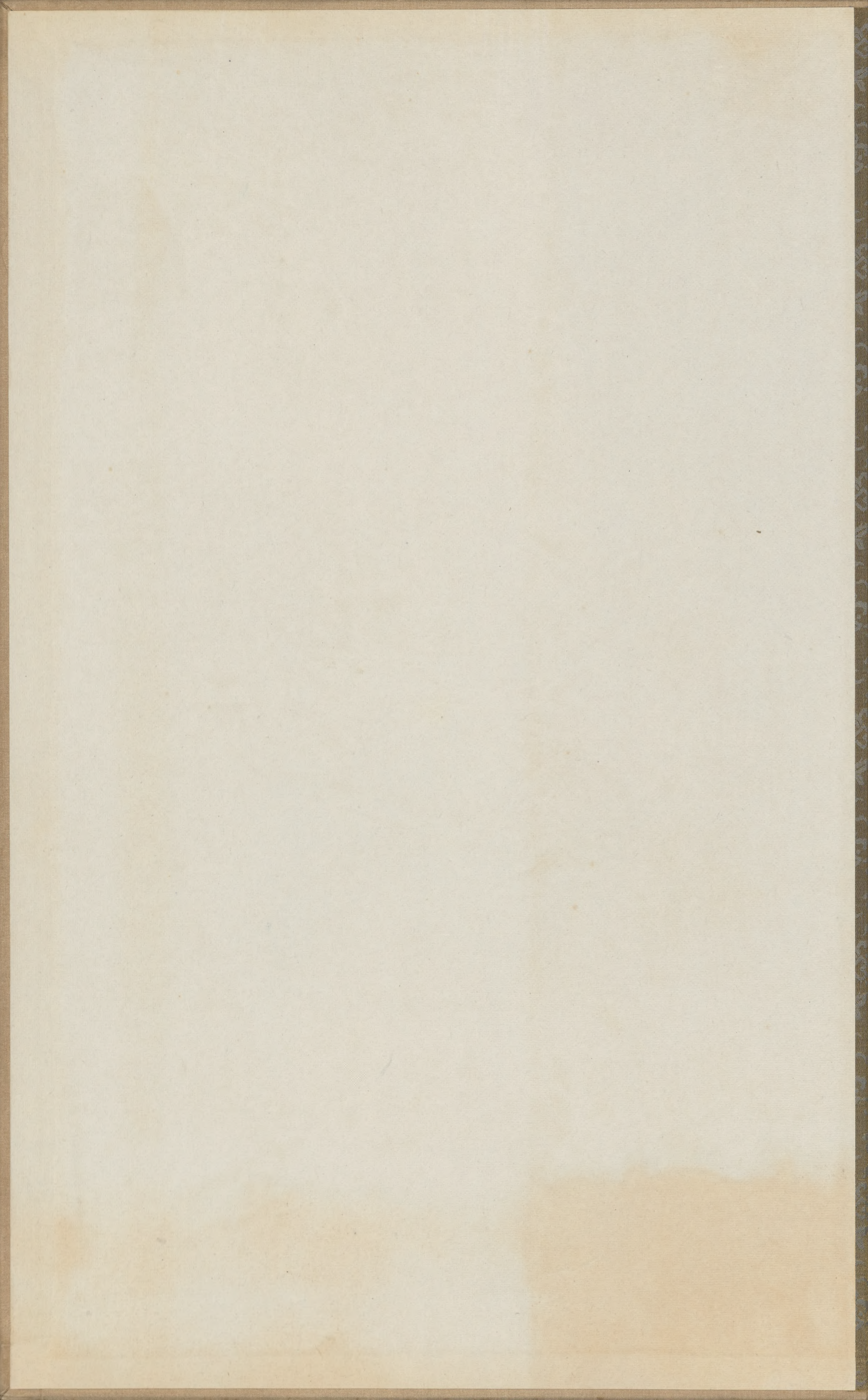
博
館
四
十
二
年
正
月
一
日
開
刊

審
美
書
刊
主
理

博
館
四
十
二
年
正
月
一
日
開
刊

審
美
書
刊
主
理







Blank Page Digitally Inserted

